

佳作

甲子園といっしんを動かす夏の舞台裏

愛媛県 済美高等学校一年 大西 恋子

七月下旬、日差し強い中大きなたばの麦わら帽子を被って私は坊っちゃんスタジアムへと向かった。野球部の応援のためだ。高校野球の観戦は三年前、松山東高校が甲子園へ行ったとき以来だった。その時、私は言葉では表せきれないほどの感動を味わった。そして甲子園球場で応援する人々が一体となるのを感じた。また、選手たちとアルプススタンドの心のつながりも心で見ることができた。あれから二年間私は部活に塾の勉強等で高校野球をテレビで見ることがもなかった。しかし、済美高校野球部が勝ち上がり、愛媛県大会の準々決勝の応援に行くことになった。

試合が始まる合図のサインレンは何とも言えない緊張感を出す。一回表で五点先制することができ、八対四で勝利した。その後も勝ち進め愛媛県大会で優勝することができた。私はこの三試合で応援のすごさを知った。どの高校も選手に思いを届け、力になる一心で声を出し、演奏を奏でる姿は忘れられない光景となった。そして選手

もそれに応えるようにプレーする姿も印象的だった。高校野球のもつ意味は心のつながりにあると感じた。

いよいよ甲子園。球場までの道のりでたくさんの方の高校球児に会うことができた。すると、大きな声であいさつをしてくれる人々ばかりだった。高校の名前の入ったユニホームで堂々と歩く姿はやる気で満ち溢れ、輝かしかった。

誰にも感動を与えた星稜戦、八回でのホームラン、十三回ではタイブレークでのセーフティバントからの史上初の逆転サヨナラ満塁弾。ある保護者の方の声かけからアルプススタンドではみんなが立って必死に応援していたときだった。あの感動は一生もので私に元気・勇氣・希望を与えてくれた。きっと球場やテレビで観ていた人たちもそうだ。五点星稜に先制されたこの試合、アルプススタンドでも表情が暗くなる人もいたが、私はずっと大丈夫。いける。と、信じていた。ずっとポジティブに周りの子とも話し、応援していると、その言葉が本当になった。スタンドからの「頑張れ」という声も、見えない思いも選手たちには伝わっているのだと改めて思うことができた。そして、感じられた。

私が感動したのはこれだけではない。負けた相手チーム、チームの応援団、そして済美高校のこれまでの試合からも学ばされ、感じるものがあった。勝つためには相手がいなくてはいけない。相手が本気を出していなくて勝ったって感動はない。一つのことを目指してライバル

たちが一生懸命戦うから感動が生まれる。相手チームからもたくさん感動をもらえた。そして、応援団。決められた枠内で精一杯球児たちにパワーを送り合う応援団から、応援には不思議な力があり、一緒に戦っているんだと気づいた。どの高校の応援も心に残っている。また、途中からアルプススタンドの応援団の隣で観る済美高校の前の試合では応援する人々の姿も間近で見ることができ、応援団の熱い思いが伝わってきた。どちらの高校もいいプレーをしたり、点を取ってもみんな拍手をするほど甲子園球場が一つとなっているのを感じられた。試合が終わると、私たちに「応援頑張れ！」と声を掛けてくださる人々もいた。毎試合暑さは厳しく、冷たいものが欲しかったが、心がほっこりするの嬉しかった。

準決勝、エース山口直哉選手の活躍には心が奪われた。また、九回表、ニアウトからの政吉選手が矢野選手につなげたときは、光が見えたような気がした。おしくも敗れてしまったけれど、矢野選手の泥まみれになりながら一塁に飛び込む姿は目に焼きついていて。全ての選手が輝いていて、心に残るプレーを観させてくれた。

ニュースなどで甲子園という輝かしい舞台の裏でどの高校にもたくさんさんのドラマがあり、あの舞台に立っていることを知った。私は高校野球にこんなにもたくさんさんのことを教えられ、与えられるとは思っていなかった。全ては夢に向かって一生懸命ここまでやってきた済美高校

野球部の皆さんのおかげだ。今年は、弱い弱いと言われる続けてここまで成長した済美ナインは私にはない夢に向かって走り続ける心の強さ、それが繋がってできた仲間との絆があることを教えてくれた。済美高生でよかったです。思えた瞬間だった。これからも与えてもらうだけではなく、応援で私も力を与えたい。